

れていたものと思われる。近世下層面の時期は、陶磁器の年代観や「慶長十四年」銘の陰刻のある鬼瓦が出土していることから、一六世紀末～一七世紀と考えている。

8 木簡の釈文・内容

- (1) 「修福院右志者為正泉禪定門忌也」今日敬白

●
□^力
力

中十六

260×30×10 081

明確な日付けが書かれていないものの、内容は板碑などに刻まれている銘文と類似しており、追善供養をしたことを示している。ただ供養の具体的な内容が五輪塔の造立なのか、何らかの法要を営んだことなのかは明確ではない。

以上が調査時での知見で、今後出土遺物を整理していく過程で道勝寺との具体的な関係なども検討していきたい。

（草原孝典）

長登銅山跡（山口県美祢郡美東町）

出土の逃亡関係木簡

長登銅山跡は本誌第一三号で報告したように、奈良時代以来の銅製鍊跡で、銅山経営に関わる木簡も多数出土している。左に紹介するのは、一九九〇年度調査で発見されたものであるが、木簡研究一三号には未報告である。釈文は次のとおり。

「逃」
十二 十一
十二 四 一
四 六 一
六 六 一
十 二
十二
四十八 冊
人

「大友三百五十五斤」

(228) $\times 52 \times 4$ 019

表の「逃」は逃亡者の意で、以下、人数が記される。銅山の下級官人が、一定期間の逃亡者を文書に清書する前のメモではなにかといわれ、当時の計算方法が知られる点でも貴重である。つまり「十二」と「四十八」だけが丸で囲まれ、その他の数字の右わきには「一」「二」の符号が残っているので、計算方法は、四回出てくる「十二」をまずかけ算で四倍して「四十八」を算出し、残りは数字を足し算で「卅」を出したと考えられ、計八十八人の逃亡者がいたと見ることができるという。

長登銅山跡出土の木簡は、生産機構の解明が可能な点で、今後の研究の進展が大いに期待されるところである。